

## 新河岸川の舟運

新河岸川の舟運は、寛永 15 年(1638)年に川越大火で焼け落ちた川越仙波東照宮を再建するために、新河岸川を使って資材を運び入れたのが始まりとされています。

その後、松平伊豆守信綱により本格的に河岸が整備していきませんが、上・下新河岸に、寺尾、牛子、扇河岸を加えた「川越五河岸」を始め、さらには仙波河岸まで開設させることとなります。

江戸に向かうには、現在の和光市の新倉河岸から荒川に合流し、蛇行しつつ、隅田川に入り浅草の花川戸を終点としておりましたが、実際には日本橋川まで向かう船もあったようです。船には、運行の速さによって、並舟、早舟、急舟、飛切り舟があり、並舟は荷物だけを運ぶ舟でした。早舟は、船頭が 4～5 人乗り、乗客は 20～30 人程度で概ね 20 時間超かかりましたが、飛切り舟は、今日下って明日上るという超特急の便でした。

新河岸川から江戸への下り荷としては、米や麦、石灰、材木などが中心でありましたが、特にそうめんや川越いもなどは非常に喜ばれたようです、また上り荷としては、塩や油、砂糖、綿などのいわゆる日用生活雑貨などが運ばれてくるとともに、江戸からは祭り文化も川越には入っており、現在の川越まつりの繁栄にも繋がるようになりました。

その後明治になり、鉄道の普及とともに輸送手段は、舟運から鉄道に移行していくようになり、最終的には昭和 3 年 10 月に、埼玉県から通舟停止が出されその役割を終えることとなりました